



Title	釜ヶ崎プロジェクト「バザールの知的創発」実践報告
Author(s)	宮本, 友介; 西川, 勝
Citation	Communication-Design. 2015, 12, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51507
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

釜ヶ崎プロジェクト「バザールの知の創発」実践報告

宮本友介（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

西川勝（大阪大学CSCD）

Practical report on the project “Emergence of Bazaar Knowledge”

Yusuke Miyamoto (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)
Masaru Nishikawa (CSCD, Osaka University)

「科学知」と「生活知」はこれまで互いに対比的に、二元論的に扱われてきた。しかし、日常生活の中に科学が融け込んだ今日、われわれが直面する問題を解決するには、両者の融合が求められるのではないだろうか。本稿では、この融合の実現に向けた取り組みとして、釜ヶ崎「哲学の会」とそれに関連する実践について報告する。

We often contrast “knowledge” with “experience.” This dualism, however, should be overcome by integration of the both to solve the problems we face in our daily life, where sciences and technologies has been more popular. In this article, as an effort to realise this integration, we report on the practice of “Tetsugaku no kai” in Kamagasaki, the town filled with various lives.

キーワード

伽藍とバザール、創発、しなやかさ

cathedral and bazaar, emergence, resilience

1. はじめに

ソフトウェア開発者のエリック・レイモンドは、ソフトウェア開発コミュニティにおける2つの手法を対比して「伽藍とバザール」と呼んだ。すなわち、伽藍方式とは少数のコアチームによる意思決定を尊重する階層的・中央集権的な手法であり、バザール方式とは多数の参加者の独自性を尊重する分権組織的な手法である。

この対比は、科学知（科学的方法によって得られる客観的あるいは間主観的な知）と生活知（日常生活の中に埋め込まれた経験的な知）にも成り立つのではないだろうか。学術機関はまさに科学知に対する権威であり、伽藍として機能している。一方で、市井に生きる人々の生活知は、多様な価値観の中で持ち寄られたバザールの知である。ただし、伽藍とバザールは対比され得るものであっても、対立するものではない。いかにして両者の「止揚」を図るかということが、われわれの大きな課題であるといえよう。

これに対する一つの試みとして、近年わが国では「伽藍の知」のアウトリーチ活動がおこ

なわれるようになってきた。しかし、われわれ「伽藍の僧侶」は必然的に伽藍の中の文脈に縛られてしまい、「バザールの知」については、その文脈に射影された部分のみしか共有することができないのである。こうした束縛から逃れるには、生活知、すなわちバザールの知の創発の「現場」に飛び込むより他の手段はない。本稿では、さまざまな「バザールの知」にあふれた釜ヶ崎での「哲学の会」活動について報告する。

2. 「釜ヶ崎」とはどのような街か

現在「釜ヶ崎」と呼ばれている地域は、大阪市西成区の北東部、萩之茶屋・山王・太子地区周辺の面積にして約0.62km²の区域にあたる（図1）。かつて釜ヶ崎とは西成郡今宮村の字であったが、明治・大正期の区画整理により既に地図上の地名としては存在しない。行政的には、（後述の「第一次釜ヶ崎暴動」を受けて）1966年に大阪府・市・府警で構成される協議会によりほぼ同一の地域を指して「あいりん地区」と命名され、公式的な呼称としては専らそちらが使用されている。しかし、現在でもそこに暮らす人々はある種の愛着、あるいは名称変更によって何らかの問題が解決したかのように扱われることに対する批判を込めて「釜ヶ崎」と呼ぶことが多く¹⁾、本稿でもこの呼称を用いることとする。まずは、「釜ヶ崎」というまちがどのように形成されてきたかについて振り返っておきたい。



図1 太子交差点から阿倍野ハルカスを見上げて

2.1 スラム・クリアランスとドヤ街としての「釜ヶ崎」の形成

江戸時代の釜ヶ崎は、大坂七墓に数えられる鳶田墓地とそれに併設された刑場が置かれ、あとはただ農地が広がる地域だった。ドヤ街としての釜ヶ崎の形成には、現在の日本橋筋にあたる名護町あるいは長町と呼ばれた地域と、大阪市の市域拡張の過程が大きく影響している。

名護町は紀州街道沿いの宿場街として栄えたが、出稼ぎ労働者等の需要に応じて木賃宿²⁾が提供されるようになり、次第に貧民が流入することでスラム街が形成されていった。明治期に入り、コレラ流行への対策と治安を改善する思惑から、行政による名護町の不良住宅の撤去が幾度か計画され、住民移転先の反対運動により頓挫していたが、公衆衛生の改善を名目として1886年（明治19年）に大阪府令「長屋建築取締規則」および「宿屋取締規則」が制定された。1891年（明治24年）には「長屋建築取締規則」が名護町に適用され、基準に満たない不潔家屋は撤去、約1万に上る住民を名護町から立ち退かせるという大規模なスラム・クリアランスが実施された。また、1898年（明治31年）には「宿屋取締規則」が改正され、大阪市内³⁾での木賃宿の営業が禁止されたことにより、木賃宿は移転もしくは業態の変更を余儀なくされた。なお、この改正の前年である1897年（明治30年）には大阪市の第一次市域拡張により、今宮村の大阪鉄道（現在のJR関西線）線路以北部分が大阪市に編入され、残存部分が木津村の一部と統合されて新たな今宮村となった⁴⁾。釜ヶ崎が、この新・今宮村の北部、大阪市に隣接する部分であったことも、その形成に重要な要因となったと言えるだろう。

さらに、1903年（明治36年）に現在の天王寺公園および新世界周辺を会場として開催された第五回内国勸業博覧会⁵⁾に向けて実施された道路拡幅工事の際にも、名護町は景観上の問題として取り沙汰されている。ただし加藤（2002）によると、この際に名護町の大通りでのいわゆる「軒切り」がおこなわれた記録はあるが、実質的な部分である裏長屋までが撤去対象とされた記録はなく、むしろ貧民街の移動にはその後続く鉄道の開通や警察の介入（破落戸・浮浪者狩り）の影響が無視できないことを指摘している。いずれにしても、こうしたスラム・クリアランスを契機として、大阪市内から排除された「名護町」が、当時は大阪市に隣接する地域であった西成郡・今宮周辺に流入し、新たな木賃宿・ドヤの街としての「釜ヶ崎」が形成されていった。

2.2 労働市場（寄場）としての「釜ヶ崎」

名護町の頃から、木賃宿には大坂の産業に合わせて油絞・米搗・酒造といった力役（肉体労働）に従事するため、各地から出稼ぎ労働者が流入していた。というよりも、こうした労働力を集中管理するために名護町という木賃宿街が形成された、という方が正確だろう。産業の移り変わりとともに主な業種の変遷はあるが、釜ヶ崎は労働力の需給バランスをとるための緩衝装置（バッファ）としての役割を果たして来た。

戦後復興期および高度経済成長期には、港湾運輸業・建設業を中心とした労働力需要が高まったこと、また1950年代からのエネルギー革命によって炭鉱が閉山ことにより、釜ヶ崎には仕事を求めて全国から労働者が集まってきた。1960年代後半には、釜ヶ崎は万国博覧会（大阪万博）に向けた労働力を供給する機能を果たし、以後バブル経済期まで流動的労働力を確保するための仕組みとして日雇労働市場＝寄場が確立された。簡易宿泊所は流入する多くの労働者を受け入れるために狭隘なワンルームが主流となった一方で、1961年に起こった「第一次釜ヶ崎暴動」（釜ヶ崎事件）以降⁶⁾、大阪市が「あいりん対策」（住宅地区改良・失業対策・福祉充実によるスラム街解消のための総合的取り組み）として、家族世帯に周辺地域の公営住宅への入居を推進したことにより、釜ヶ崎は单身男性日雇労働者が密集する地域となった。

2.3 貧困の街から福祉の街としての「釜ヶ崎」

1990年代のバブル経済の崩壊以降、釜ヶ崎の寄場としての機能は急激に低下した。背景としては、求人約9割を占める建設業の事業規模縮小とともに、建設工法の機械化・高度化、派遣労働など求人雇用形態の多様化がある。

釜ヶ崎の寄場における「現金」（現金払いで日々雇用する形態）での年間求人数は、1989年度には延べ1,874,507件あった2001年度には656,163件まで下落し、2007年度以降はサブブ



図2 福祉住宅へと変貌した簡易宿泊所前の看板

ライム住宅ローン危機の表面化⁷⁾によってさらに低迷し、2013年度には316,916件にまで落ち込んでいる。また、必ずしも加入率は高くはないと言われるが、日雇労働者数の推移としては日雇労働被保険者数（「白手帳」保持者数）も1986年の24,458人をピークに2009年には2,025人にまで減少しており、1997年以降は過半数が55歳以上と日雇労働者の高齢化も進んでいることがわかる（いずれも西成労働福祉センター調べ）。負傷・疾病をきっかけに休みと、そのまま次の職に就くことができないというケースも多い。

こうした景気後退による失業率の悪化は全国的な問題であったが、流動的な雇用形態である寄場ではその影響が顕著であり、簡易宿泊所にも入ることができない日雇労働者は、路上での生活を余儀なくされた。

このような危機的な事態を受けて、2000年には釜ヶ崎に「臨時夜間緊急避難所」（シェルター）が開設されるなど、大阪市によるいわゆるホームレス対策が進んだ。また、2002年には「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」（平成14年法律第105号）が制定され、基本方針として「ホームレスに対する生活保護の適用に当たっては、居住地がないことや稼働能力があることのみをもって保護の要件に欠けるものでない」という考え方が示されたため、元来は固定した住居をもたなかった日雇労働者たちにも生活保護制度の適用が進み、一般的な賃貸住宅で定住する人が増加した。その中には、簡易宿泊所から改築したものもあり、生活保護受給者のみを入居対象とし、申請手続きの相談なども引き受ける「福祉住宅」へと姿を変えている（図2）。

生活保護の現状について、全国の保護率が17.0%であるのに対して大阪市全体では55.5%と高い水準であるが、その要因の一つとして釜ヶ崎での高い保護率が挙げられる。大阪市各区の生活保護統計によると、2014年9月時点における西成区の生活保護世帯数は25,586世帯、被生活保護人員は28,166人、保護率は237.9%であり、市内各区の中でも飛び抜けて高い。また、生活保護受給世帯あたり平均人員は1.1であり、単身世帯の割合も市内各区の中で最も高いことがわかる。現在の釜ヶ崎は、かつての労働市場の街から福祉の街へと変容しつつある。

2.4 釜ヶ崎におけるコミュニティの形成

以上のように、近年釜ヶ崎に暮らす人々の中では単身・高齢の生活保護受給者が占める割合が高くなっている。また、日雇労働者として全国各地から流入した経緯より、地域に十分な人間関係の基盤を持たず、コミュニティ活動に参加することも少ない。また、寄場には互いの過去や個人的な事情に踏み込まないという独特の関係規範、いわゆる「不関与規範」⁸⁾があったが、生活保護を受給し定住生活に移行したことにより、仕事の現場や酒場といった流動的な交遊の場から離れ、隣人との固定的な人間関係でトラブルを抱えることを恐れるようになり、かえって社会的に孤立するリスクを高めるといふ矛盾を孕んでいる（石川、

2013)。これに対して、ケースワーカーや介護福祉団体の関与などにより、さまざまな取り組みがおこなわれているが、量的な点で十分に対応が追いついていないのが現状である。

3. 実践

ここでは、2つの取り組みについて報告する。いずれも月に1回の頻度で開催される哲学カフェである。ひとつは、2012年4月より釜ヶ崎の中心にある西成市民館で主に実施している「釜ヶ崎 哲学の会」であり、毎回一つのテーマ（表1）について2時間程度、脱線しながら語り合う。もうひとつは、2013年7月より西成区からの委託事業である「単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業」（通称：ひと花プロジェクト）の中で、表現プログラムの一環として実施している「アジール呱呱の声」である。

釜ヶ崎での哲学カフェの開催については、単身高齢者の居場所としての需要と、伽藍的・権威的な知を前面に持ち出さなくてもよいといった点がうまく結びついている。いずれの場でも、基本的なルールとして以下のことを提示している：①自己紹介は不要、②発言は「義務」ではない、③語るときは自分の経験（言葉）で、④他者の発言は遮断せずに最後まで聞く。この単純なルールは、「不関与規範」を根底とした釜ヶ崎独自の関係性の中で、過度に自己開示を要求せず、また単なる論争に終始しないために重大な役割を果たしている。

参加者には、回を重ねるごとに「常連」が増えてくるが、時折ふらっと参加してくれる人もいる。常連メンバーの間には従来の釜ヶ崎的「不関与規範」とは異なる形で、新たな連帯が生まれているように感じられる。とりわけ過去の話聞き出そうとすることはないが、自然な形で参加者自らの豊かな人生経験談が語られることがある。無論、明るい話ばかりではないが、いままで釜ヶ崎では語られることのなかったそれぞれの「過去」が共有される瞬間

表1 「哲学の会」のテーマ（第1回から第24回まで）

01：幸せについて考える	13：鬱
02：遊び心について語る	14：美しい
03：色について	15：自尊心
04：自分とは	16：余裕
05：安らぎ	17：火
06：親しみ	18：水
07：死	19：風
08：自由	20：土
09：愛	21：レジリエンス
10：生きるとは何か	22：他人
11：賭け	23：家族
12：次元	24：自分

がある。

参考までに一例を引用してみよう。表2, 3は、「アジール呱呱の声」（2013年7月16日）で交わされた対話の一部を抜粋したものである。単身高齢生活保護受給者が主な参加者であるが、とくにテーマとして設定したわけではないのにも拘わらず、生活保護を受給するに至った経緯や、その際の逡巡、これからの希望や不安について、赤裸に語られる場面があった。また、働くことへの高い意欲や、社会の役に立ちたいという思い、過去の仕事に対する誇り、若い世代への励ましなど、彼らの中では、単にステロタイプ的な「お互いに触れてはならない暗い過去」だけではなく、共有され得る、あるいは共有したいものがあるのだということを感じさせられた。

「哲学の会」の今後の展開としては、参加者の中から新たな試みとして、芸術創作を主題とした「楽描きの会」が2014年4月より発足した。言葉のコミュニケーションに依るのみならず、今後こうした身体的・芸術的コミュニケーションも取り入れながら、釜ヶ崎における「パズル的な知」の創発を継続していきたい。

表2 「生活保護について」の対話

F：僕らの場合、(人生の) 楽しみのエリアが小さいからね。遊ぶにしても体はついてこない、お金は続かない。そうすると、行きたいなと思っても我慢しますわ。今日は良かったな一って思えることは無くなってきますよね、必然的に。

A：どんなことが一番、無くなってきたんですか？

F：うーん、そうですね…。一番というのは、生活保護を受けるようになったときですね、僕自身では。最後の扉を開けてしまったな、という気持ちはあったんですね。これから先、開ける扉があるんなら、もう死ぬ時だけやって。そういう感覚になってしまったことかな。もう他に新しい仕事してどうのこうのっていう気持ちも無くなるし、開ける扉のない部屋に入ってしまったなという気があったんです、生活保護を受給するようになったときに。それまでには、まだ生活保護を受けるような身勝手なこと考えてたらあかんっていう気持ちがあって…。手続きしてなかったんですね。で、もうとことんダメになって、生活保護の手続きをしたときに、僕はそういう考えになりましたね。

A：誰かに言われたりしましたか？そういう「最後の扉ですよ」って…。

F：いやいや、人からは言われたことはない。いままでずっと、2年半くらいホームレスしてて、職務質問なんかされたときに、ある時、警察官の人が、なぜ(生活保護を) 受けないのですかという話をして。だけど僕は、自分勝手な生き方で生きてきて…。まあ、月2万くらいありましたから、なんとか食べていけると。体の動くうちは申請する気はないんです、という話はしたんですけど。考え過ぎやと言われてたら考え過ぎなんでしょうけど、一本のその線があったから生きてるってね。

A：そこからいろんな楽しみが消えていったんですか？

F：そうですね。もう、先に夢をみないと、勝手に決めましたね、できないって。やる以上は、生活保護を受けてたら悪い、何かするにあたってね。仕事をするにあたって、僕ら行ったら、1万5千円、6千円もらってましたよね。ちょっと働けば、(生活保護を) 切られるんじゃないかと。そうなるとその仕事が続くという保証もありませんし、体力が続くかどうか分かりません。そうなる困る、それじゃやめとこかという形になるんですね。ですから、僕らが偉そうにいうたら悪いですけど、働いて、それを申請して、生活保護ですね、それを一回受け取って、たとえば誰もいない時だったら弔電にす

るとか、お骨をもらいにこられる方の旅費にするとかいった形をとって預かってもらったら、少しは考え方が変わるんじゃないですかね。

A：自分で自分の稼ぎをしっかり持っているときには、いろんな夢も持てるし、可能性みたいなのも考えられるし、いろんなことで楽しんでいられるけど、それが無いのに思えるか、どうですかね。

C：63、4歳くらいまで普通に仕事できたんですけど、ある時、64歳くらいから、一気に体力が落ちてきて、体がしんどくなってしまい、いままでやってたことができなくなってきた。で、私、ちょっと蒸発してきた人間なんですけどね、30歳くらいで蒸発して、10年くらい神戸港の方で港の仕事をして、いろいろ資格とるのに身分保証が要るけど取れないものだから、西成へ逃げきて、乞食か、20年くらいかな、日雇い仕事して、63歳くらいまでできてたんですよ。お金をちょっと受け取って、後のことなんか全然考えてなかったね。働けなくなったらどうしよう、なんて。

A：まあ、僕も考えてませんけどねえ…。(笑)

C：65歳になったら、なんにも仕事に行かれへんし…。困ったなあ。ちょうどそのころ、65歳を過ぎた人は申請すればくれると。それまでは、わしらのときは大変でした。いろいろ証明もあって。職安も10回以上通ってね、あちこち全部落とされて、血圧が高くて持病だから。それで、なんとか生活保護をもらえるようになって。で、おっしゃったようにね、生活保護もらって恥ずかしいとか深く考える余裕なくて助かったなあ、と。その後ですね、自分の楽しみが無くなるなんてことなかったですね。いろいろ生活を切り詰めて、例えば340円の週刊誌はあそこ行ったら50円で買えるとか。そしたら結構余裕が出てくるものですね。ですから、いろいろテリトリーが増える、カメラ買ったりとか。自分で楽しみを見つけられます、いろんな不安もいっぱいありますけどね。

A：保証がないということと、楽しみがないということが、一緒にはなっていないかと。

C：せっかく生活保護もらって遊ばしてもらってるんだから、なんかボランティアとか、鳥澁がましければ、人の役に立つことをしたいなと思うてはいるんです。

A：まあ(私も)同じような考え方ですね。別に自分の金にするために働くんじゃないかと。

C：うん、人のためになって、お金にできたらいいんだけどね。

A：(Gさんに)今の楽しみはありますか？

D：…ボランティアやったり…。それからもうかなわんもんやけど、ビールくれたり飲み物もうれしいな。(笑)

(A：進行役、B、C、D、E、F：単身高齢生活保護受給者、G：20代の男性)

表3 「仕事について」の対話

A：やっぱり仕事っていうのは、結構楽しみの根っこにあるのかな？

B：仕事っていうのは、やっぱりありますね。うん、楽しい。俺、去年の9月まで、72歳までやっと思ったもんね。「もう、やめとけ、やめとけ」言われたけど。面白い。でも考えることと体がついていかないとけない。俺、いままで習ったこと頭に入っているけども、これがね、体がついていかない。教えることは教えるけども、若い子とかね。

G：今、居酒屋でバイトしてるんですけど、夕方5時から4時までで…大きい声出して今日も声が枯れているんですが。自分はボランティア活動とかアートを使ったワークショップにも興味があって、いまちょっとずつ、活動し始めているんですけど、仕事をしてるとそっちに力が注げないなというのがあって、辞めたいなとかなっているんです。仕事が楽しいというふうには、イマイチ思えていない…。

E：これっっちゃう、飯食うのも忘れるほど惚れ込む仕事はまだ見つかってないんやな。

B：まだ、これからや、ね。まだこれから、勉強やと思ってる…。

C：継続してね、嫌なことでも、ずーと一つのことを続けてやってたら、50、60になって、この仕事やっとなって良かったな、誰にもこの仕事やったら負けん、そうになったら楽しくなるわ。

F：そうですね、何事も一生懸命やるのがいいんじゃないですか。勉強も仕事も遊びも、悪さも。すべて一生懸命やらない人間て面白くないんとちゃいますか。僕ら若い頃そうやって生きてきましたもん。

C：わしら若い頃ね、選んどられんかったもん。何でもやらないあかんかった。今みたいに、何でもある時代じゃなかった。好きなことやれたら一番だと思うけどね。

E：そら仕事に惚れてほしい。

F：僕なんか、鉄ばかりいじって40何年…鉄骨とか造船とか…。鉄は人間と違って、叩いても、穴開けても痛いと言わない。この鉄板とこの鉄板を溶接すると言うても、「この鉄板とくつつくのイヤヤ」なんて言わない。人間は言いますからね。あの子はイヤヤとか…。

A：あー、言いますよね。一緒になつたくせに「イヤヤ」言いますもんね。

F：そうそう（笑）。僕らの場合は、もの言わない物とずっと40年以上…。一番最初に建てたビルが、桜橋の南西側にある東洋ビル。それが、銘板みたら昭和40年ってなりましたからね。

A：そういう仕事はまだ、いまでも行けば見れるわけなんですね。

F：うん、僕の場合はね、20年近く、国鉄の時代から、JRの仕事してきましたんで。電車で走ると、この駅もやったなあ、このホームもやったなあっていうのが出てくるんです。それが楽しいんですね。

(A：進行役、B、C、D、E、F：単身高齢生活保護受給者、G：20代の男性)

注

- 1) 他の地域へ働きに出る日雇労働者の間では「ニシナリ」や寄場があった「霞町」といった呼称が用いられることも多いという。これは地域外から参照するときの利便性を反映しているものと考えられる。
- 2) 木賃宿とは、食事が提供される旅籠とは対照的に自炊を基本とし、日ごとに薪代（燃料費）としての「木賃」を支払うことで宿泊できる簡素な宿のことであり、簡易宿泊所（ドヤ）の原型とも言える。実質的には、一時的に宿泊する施設というよりも、長期滞在を前提として日ぎめで家賃を支払う賃貸住宅・長屋の形態が一般的になっていた。
- 3) 変更点として「第32条 木賃宿ハ大阪市、堺市（並松町ヲ除ク）ニ於イテ営業スルコトヲユルサズ」という条文が追加された。
- 4) ちなみに、釜ヶ崎を含めた新・今宮町が西成区の一部として大阪市の編入されるのは1925年（大正14年）の第二次市域拡張の際である。それに先立つ1922年（大正12年）4月には、今宮町内の区域変更がおこなわれ、字としての釜ヶ崎は東入船・西入船・甲岸に分割される形で消滅している。
- 5) 内国勸業博覧会は、その名が示すとおり国内の殖産興業を推し進めるために開催された博覧会であるが、第五回内国勸業博覧会では初めて諸外国の出品が認められ、将来の万国

博覧会を意識したものであった。

- 6) 「第一次釜ヶ崎暴動」の前年、1960年には東京・山谷で日雇労働者を中心とした暴動が起こっており、これを機に釜ヶ崎でも民生事業・隣保事業を積極的におこない環境浄化を図ることを目的として西成愛隣会が結成されている。
- 7) 一般には2008年秋の「リーマンショック」を転機として議論されることが多いが、実際にはその前年には建設業に対する投資額の減少が始まっており、事業規模の縮小につながったと考えられる。
- 8) 一般論として確かに釜ヶ崎に住む人々の間にある種の関係規範が存在することは認められるが、これは「聞かれない過去がある」という経験の共有に根ざす部分があり、これを「不関与規範」と呼ぶのはある一側面のみを捉えているのではないかと思われる。この点については今後改めて論じたい。

文献

- 石川 翠 (2013) 「釜ヶ崎における社会的孤立」西川 勝 (編) 「大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 高齢社会プロジェクト活動報告書『孤独に応答する孤独 — 釜ヶ崎・アフリカから —』」: 23-31.
- 斎藤 俊輔 (1997) 「釜ヶ崎風土記」葉文館出版.
- 白波瀬 達也 (2013) 「釜ヶ崎における死と弔い」西川 勝 (編) 「大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 高齢社会プロジェクト活動報告書『孤独に応答する孤独 — 釜ヶ崎・アフリカから —』」: 34.
- 奈良 由美子・伊勢田 哲治 (2009) 「生活知と科学知」放送大学教育振興会.
- 西川 勝 (2013) 「孤独に応答する孤独」西川 勝 (編) 「大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 高齢社会プロジェクト活動報告書『孤独に応答する孤独 — 釜ヶ崎・アフリカから —』」: 34-11.
- Raymond, E (1999) *The Cathedral and the Bazaar*. = (2000) 山形 浩生 (訳) 『伽藍とバザール』 (<http://www.catb.org/~esr/writings/cathedral-bazaar/cathedral-bazaar/>)